桑名別院 婦人会だより

第24号

2022（令和4）年3月1日発行

編　集　桑名別院婦人会
発行人　伊藤たね子
発行所　桑名別院本統寺

会長挨拶

「つれづれなる思い」

今年は立春を過ぎてもまだ寒く、あちこちから雪の便りが届きます。そしてコロナ禍で世間が騒がしいです。外出も限られ、過ぎ去った事を思う時間が多くなりました。

私は小さい頃、体が弱くて10才の時は、肋膜炎で2カ月間も学校を休み、自宅で家族に見守られて過ごしていました。家は農家で祖父母、両親 妹 弟・ニワトリ・ヤギに囲まれ、周りには誰かの姿があって、決してひとりぼっちではなかった事を思い出します。

長い人生、あれやこれやといっぱいあって80年が経ち、今では高齢者となった私に息子達がコロナワクチンの接種をうるさく言います。

昨年7月に義務として2回の無料接種を済ませたのに後遺症があって年末までつらい日々を送り、今も薬が離せません。そして日々コロナの話題がつきない生活が続き、最近では命について考えることが多くなりました。

現在、東本願寺では、「宗祖親鸞聖人御誕生八百五十年立教開宗八百年」慶讃テーマとして、

「南無阿弥陀仏―人と生まれたことの意味をたずねていこう―」

が掲げられています。事あるごとに耳にしたり目にしたりして、今はこの言葉が私の日常生活の中心になっています。いかに毎日を生きるのか、若い頃の元気はもうないけれど、朝から寝るまで私には時間がある、死は何時来るのか、一瞬か、命の使い方をどうするか、毎日は続いて、私は生かされている。

穏やかで明るい日差しの中、庭の草や木を眺め、風を感じる事の出来る今の私、ゆったりした時の何という幸せ、「ありがたいなぁ」思わず「南無阿弥陀仏…」です。

まだこの先何が起こるか分からないけれど、残された日々を自分らしく「南無阿弥陀仏」を支えとして精一杯生きていきたいものと念じております。

しかれば、本願を信ぜんには、他の善も要にあらず、念仏にまさるべき善なにゆえに。

（歎異抄第一章）

桑名別院婦人会会長
伊藤たね子

輪番挨拶

「いのち尽くさせていただく」

桑名別院婦人会の皆さまには、仏法聴聞を通して別院の護持のために格別なるお力添えをいただいておりますこと心より御礼申し上げます。

さて、婦人会の皆さまからはいつも「させていただきます」という言葉をいただきます。「お参りさせていただきます」「ご聴聞させていただきます」「お手伝いさせていただきます」…文法上は適切かどうかわからない表現ですが、とても大切で意味深いことをあらわしていると思います。

作家の司馬遼太郎氏は、「させて頂くという語は、浄土真宗の教義上から出たもので、すべて阿弥陀如来（他力）によって生かしていただいている。（中略）この言葉の使い方は、阿弥陀如来の絶対他力の中でしか成立しない」と著書に書かれております。

つまり、この「させていただく」は、すべての行いは阿弥陀如来の他力のはたらきによる、お念仏の教えから生まれた言葉であるということです。

私たちの日常は「お参りする」「法話を聞く」「お手伝いする」です。最近では、「お参りせななならん」「お手伝いせななならん」、というあり様です。この私を中心に自力の心でしか生きられません。

しかし、お念仏をいただくことにおいては、自分の行いを自分の手柄としない。どこまでも阿弥陀さまを通じて、ご縁があってさせていただき、仕事をするにも、聞法するにも、仏さまのお給仕をするにも、他力の中で、させていただくばかりです。

現在は、新型コロナウイルス感染症によって集い語り合う場が少なくなっている状況ですが、婦人会の活動を通して共々に阿弥陀さまのおはたらきの中で、お仕事をさせていただき、年を重ねさせていただき、いのちを尽くさせていただきましょう。

桑名別院輪番 安田 雅

婦人会役員選出

任期２０２２年３月～２０２４年２月末まで

会長	伊藤たね子
副会長	立松愛子
書記	近藤悦子
会計	日下部澄子
会計監査	坂口静子・小沢悦子
地区役員	岩田裕子・井後福美
桑名・長島	金森美代子・林恵美子
朝日	矢野八千代・後藤裕美
いなべ市・東員	後藤利子・後藤秋子 出口厚子

別院に打敷を寄贈

桑名別院本堂内陣にお掛けする打敷、特に夏用の打敷の老朽化が著しかったことを憂慮いたしまして、婦人会会計の積み立て金より夏の打ち敷一式（桐箱入りの5枚組）を購入し、寄贈いたしました。打敷は昨年の秋季彼岸会にて初披露され、新しい打敷のもと、10月14日には婦人会報恩講をお勤めいたしました。